

# 英語の受動態に関する制約

林 龍 次 郎

### Restrictions on the Passive in English

---

This paper is concerned with those English verbs which have restrictions on passivization. It first attempts to classify such verbs, which include *weigh*, *cost*, *have*, *want*, *resemble*, *suit*, *reach*, etc. Then it points out some factors which affect the acceptability of passives and discusses how they interact with the verbs in question. This paper examines the restrictions on the passive in detail and tries to discover principles governing the occurrence of passive sentences.

It is shown that the accounts based on "affectedness" or "characterization" are not revealing, as far as the verbs discussed here are concerned, and that studies of idiosyncrasies of each verb are indispensable.

## 1 はじめに

英語の受動態の成立条件については、今までに多くの研究がなされている。古くは Jackendoff (1972) の主題階層に基づく仮説がある。その後 Bolinger (1975) は「受動文の主語は動詞が表す行為によって真に影響を受ける (affected) ものでなければならない」という affectedness に基づく説明を提案した。また, Cureton (1979), 高見 (1989) は, 受動文はその文の主語の「特性 (quality)」や「特徴づけ (characterization)」を表すときに成立するという機能論的説明を提出している。

これらの研究の多くに共通しているのは, 下に挙げるようないわゆる擬似受動文 (pseudo-passive) または前置詞受動態 (prepositional passive) を中心に考察していることである。

- (1) This bed has been slept in too much.
- (2) The bridge has been walked under by generations of lovers.
- (3) This cup was drunk out of by Napoleon.

Davison (1980), 高見 (1989) 等はほぼこれらに問題を絞って論じているが, Bolinger 等いくつかの論文は, 擬似受動文と通常の受動文を同等に論じ, 「影響」「特性」といった概念に基づく説明が受動態一般に広く適用できると主張している。

しかし, 「影響」「特性」「特徴づけ」等の概念は, 擬似受動文においてはある程度有効なように思われるが, これらによりすべての受動態を統一的に説明しようとするのは無理がある。こうした説明はごく普通の受動文に当てはまらない場合が多い。たとえば次のような例では「影響」「特性」がどう関与するのか明らかでない。

- (4) A loud voice was heard a moment ago.
- (5) English is spoken in Canada.
- (6) Mary is followed by John in the line.

(7) The conference was preceded by a reception.

(6)(7)は Jackendoff (1972) の主題階層条件でも説明不可能な例である。

また、次のような適格性の差はどんな説明をとっても問題として残るだろう。

(8) \*A book was had by John.

(9) The house was owned by Mr. Jones.

have, own はいずれも所有の意を表すが、前者が受身を許さないのに対し、後者は受動態として生じうる。

本稿では、Lees (1960) が中間動詞と呼んだ受身の不可能な他動詞、及び受動化に制限のある他動詞を取り上げて、その振舞いを検討する。いわゆる擬似受動文については扱わず、「影響」「特性」による説明が及ばない部分を範囲とする。そして、上で述べた動詞のどんな語彙特性が受動態の成立条件に関係しているかを考える。なお、ここで考えるのは NP ののみをとる他動詞構文だけで、文補部をとる構文や NP+to 不定詞をとる構文等は扱わない。

## 2 受動態にならない動詞・制約のある動詞

まず、名詞句の補部をとるにもかかわらず受動態の不可能な動詞、及び生起に制限のある動詞を列举し、分類することから始める。

### (I) 数量を表す補部をとる動詞

weigh, cost

### (II) 所有・非所有の概念に関わる動詞

have, own, possess, lack, want, hold, contain

### (III) (a) 2つの NP の相互関係を表す動詞

suit, fit, befit, become, deserve, resemble, mean, equal, marry, meet

### (b) 場所 (Location) を示す補部をとる動詞

- (i) follow, precede, surround, survive, adjoin, *be*fall
  - (ii) approach, reach, enter, leave, turn, elude, escape, inhabit
- (Ⅳ) その他

revenge

斜体字で示したのは、受動分詞 (passive participle, いわゆる過去分詞と同じ形態であるが、完了形を作るものとは別に考えてこう呼ぶ) を本来持たないと考えられる動詞で、それ以外は、ある意味以外では受動態が可能であったり、(後に議論するが) 文脈等によって容認されたりする動詞である。

ではこれらの動詞の特性を概観してみよう。(Ⅰ)の受動態は、「～を計量する (weigh)」「～の原価を見積もる (cost)」という意味を除けば常に不可能である。

- (10) This car costs five thousand dollars.
- (11) \*Five thousand dollars are cost by this car.
- (12) Mary weighs one hundred pounds.
- (13) \*One hundred pounds are weighed by Mary.

(10)(12)の five thousand dollars や one hundred pounds は cost, weigh の純粋な目的語ではなく、これらの動詞は be 動詞にやや近い擬他動詞とも呼ぶべきものと思われる。実際のところ、cost, weigh は be で置き換えることができる。

- (14) This car is five thousand dollars.
- (15) Mary is one hundred pounds.

次に(Ⅱ)の動詞を見よう。所有の意の have が受動態を欠くことは周知のとおりである。

- (16) John has a house.
- (17) \*A house is had by John.

本論では動詞 lack の意味を [not have] のように分析し<sup>1)</sup>, lack に受動態がないことは have に受動態がないことと平行的であると考え。own, possess, want は受身が全く不可能ではないが、生起に制限がある。これ

らについては後で詳しく述べる。

なお、ここでの hold は「収容能力」を表す意味である。

(Ⅰ)は be に近い性質を持つ動詞、(Ⅱ)は have 及びそれと共通する性質を持つ動詞であった。Quirk et al. (1985, p.162) も受身にならないのは “verbs of being and having” であるという指摘をしている。それでは、Quirk et al. も挙げている resemble, suit, become 等の動詞はどうであろうか。意味的には繫辞 (copula) に近いと考えることもできるが、(Ⅰ)の cost, weigh とは異なり、数量を表す名詞句をとるのではない。Quirk et al. (p.205) は、resemble が ‘be like’ に近い意味なので verb of *being* と考えているようだが、たとえば動詞 like は ‘be fond of’ に近い意味なのに受身が可能であるし、他にも love, know, see, hear 等受動化できる状態動詞は存在する。

以上のようなことから、“verbs of being and having” 以外にも受動態にならないかまたは制限のある動詞のカテゴリーをたてる必要がある。ここで(Ⅲ)と分類したのは、主語と目的語のあいだにある種の位置関係があると考えられる動詞群である。(Ⅲa)は、主語と目的語の相互関係を示す動詞で、適合・類似・対等などの概念に関わるものが中心である。suit, fit, befit, become, deserve は「似合う」「適する」等の「適合」であり、resemble<sup>2)</sup> は「類似」を表す。mean, equal で受身が不可能なのは次のような用法に限られる。

(18) The French word ‘oui’ means ‘yes’.

(19) \*‘Yes’ is meant by the French word ‘oui’.

(20) Five times four equals twenty.

(21) \*Twenty is equalled by five times four.

equal でも下のような場合は受動化できる。

(22) The world record was equalled by Smith.

(20)の equal は数量を示す語をとる動詞として(Ⅰ)に含めることもできるだろう。

marry と meet は、次の用法において受動化できない。

- (23) John married Mary last month.
- (24) \*Mary was married by John last month<sup>3)</sup>.
- (25) Jane met a tall gentleman on the way.
- (26) \*A tall gentleman was met by Jane on the way.
- (27) Wilbur Street meets Potter Avenue at this point.
- (28) \*Potter Avenue is met by Wilbur Street at this point.

これら2つの動詞においては、主語と目的語がまったく対等の資格を持つものとして捉えられている<sup>4)</sup>。

さて、(Ⅲb)類であるが、一見するとこれらは(Ⅲa)とはまったく異質である。特に(i)の follow, precede, surround, survive, adjoin 等は完全に受動態を許すと考えられるのでこのような分類には違和感があるかもしれない。しかし、これらの動詞は受動態で用いられるとき、by 句が義務的に生じるという点に注目したい。

- (29) The music was followed by a short interval.
- (30) \*The music was followed. (Quirk et al. p.165)
- (31) The dinner was preceded by tequila highballs all round.
- (32) \*The dinner was preceded.
- (33) John was survived by his wife.
- (34) \*John was survived.
- (35) The dot is surrounded by the circle.
- (36) \*The dot is surrounded.

一般に受動文は by 句が明示されないほうがむしろ普通である。follow 等の動詞は、by 句が生じなければ非文になるという点で受動態に関して「制限が強い」と解釈できる。

(ii) の approach, reach, enter, leave 等も受動態成立には by 句が必要なが多い。また、これらの動詞の受動態には次のような制限があることも指摘されている。

- (37) The store was entered by the two thieves.  
 (38) \*The store was entered by the two customers.  
 (39) The capital is visited by many tourists every year.  
 (40) \*The capital is often visited by me.  
 (41) I was approached by the stranger.  
 (42) \*I was approached by the train.  
 (43) The conclusion was reached late last night.  
 (44) \*The station was reached late last night.

(Ⅲb)動詞群の特徴は、場所 (Location)<sup>5)</sup>を表す NP を目的語にとるということである。このうち(Ⅲb i)は主語にも場所をとり、主語と目的語とのあいだに対称性があると考えられる。一方(Ⅲb ii)は主語が主に動作主性を帯びた人間であり、目的語とのあいだに対称性はない。(42)では主語が無生の train で、I は単なる場所のように捉えられているのに対し、(41)では近寄ってくるのが有生の stranger であるので、I は単なる場所ではなくたとえば「話しかける対象」として捉えられる。このために(41)は(42)より容認されやすいものと思われる。そして(43)が可能なのは、(44)と違って the conclusion が場所というより reach の主題 (Theme) に近くなっているためである。

また同じ場所でも、起点 (Source) は着点 (Goal) より受動文の主語となりにくい。したがって次のような差が見られる。

- (45) The village can be reached in two hours.  
 (46) \*This city can be left immediately.

elude と escape の受身がほとんど不可能なもの、目的語が「～から」に相当する一種の起点だからである。こうした起点と着点とのあいだの非対称性は Jackendoff (1972) の主題階層条件では説明できない。

なお、その他として挙げた revenge は次のような用法の場合である。

- (47) He revenged his father.  
 (48) \*His father was revenged by him.



これは「～の復讐をする」のように日本語の「ノ」格に対応して英語では直接目的語になっている珍しい例でもある。

### 3 受動態を成立しやすくする要因

前節で概観した動詞の中で多くのものは、まったく受動態にならないわけではなく受動態になりにくいというものである。同じ動詞でも場合によって受身の容認度が変わることは、過去の研究でも指摘されているとおりである。本節では、受動態を成立しやすくする要因を、前節で挙げた動詞について検討し、列挙することにする。

#### ①動作を示す意味要素

受身にならない動詞、なりにくい動詞は、前節(Ⅲ b ii)の一部を除けば、進行形にならない状態動詞(stative verb)が非常に多い。しかし、これらでも動作を表す意味を帯びると受動態が可能になる場合がある。

have は、所有の意味においては受身がまったく不可能であるが、次のような意味では容認されることがある。

(i) ～を手に入れる (obtain)

(49) This book can be had for ten dollars.

(ii) ～を食べる, 飲む (eat, drink)

(50) Breakfast can be had at nine.

(iii) ～を経験する (experience)

(51) A good time was had by all.

(iv) ～をだます (deceive)

(52) I'm afraid you've been had by Tom.

このうち(iv)の意味だけは受身で使われるのがむしろ普通であるが、(i)は can 等を伴うか、あるいは there is(was) で始まる存在文等に限られ、(iii) は have a good time という成句のみにほぼ限定される。したがって、have は本来受動分詞を持たない動詞であり、上のような特別な場合に受動分詞

が派生的に生じる、と考えてよいであろう。

他には、follow も、前節(29)のような例では by 句が義務的という制約がつくが、「追いかける」という動作を表す場合はこうした制限がない。

(53) We're being followed.

## ②「非実現」を表す意味要素

上で have に関して述べたように、'can be' や 'may be' の付いた受動文は、2 節で挙げた動詞についても容認可能性が高い場合が多い。これに対して一回の出来事を表す単純な過去形は容認度が低くなる。

(54) The city can be reached in an hour.

(55) \*The city was reached in an hour yesterday.

もう一つ受動文を容認しやすくする要素に否定辞がある。これは出来事の「非実現」を表すという点で can や may と同等の機能を持っている。

(56) There is nothing to be had from this book.

(57) (?) John isn't resembled by any of his children.

否定が受動態を成立しやすくするという事実は、seen, spoken, told, equalled といった過去分詞形が形容詞化してはいないのに対して、unseen, unspoken, untold, unequalled 等の否定辞 un- のついた形が形容詞として辞書に登録されていることとも関係があるように思われる。

(58) \*seen dangers, \*a spoken wish,

\*a told story, \*equalled cruelty

(59) unseen dangers, an unspoken wish,

an untold story, unequalled cruelty

非実現という意味要素によって受動態が成立しやすくなるということは、言い換えると単一の特定の出来事は受身として生じるのに制限があるということである。

## ③文末焦点の原則 (by 句の情報量)

受動文の by 句の部分が by John のように一個人の名前だと容認されなくても、by most people のように不特定で一般の人を表す場合や、by

George Washington のように「有名人」の場合は容認可能性が高まるということはしばしば指摘されている。こうした現象を Bolinger は「影響」、高見は（擬似受動文に関してだが）受身主語の「特徴づけ」という概念により説明しようとしている。しかしこれはむしろ by 句の情報量ということが関係していると思われる。

(60) \*The store was entered by the two customers.

(61) The store was entered by the two thieves.

店に「客」が入るのは当然のことであり、(60)の中で by 句は有意義な情報を担っていないためにこの文は容認されない、と考えられる。次の文では、「客が店に入る」という点では(60)と同じだが容認可能性が高くなっている。

(62) (?)The store was entered by two customers, not three.

この文の場合は by 句内に対比強勢があるため、情報量が多くなっている。(60)と(62)の差は「影響」節では説明できない。また、「主語の特徴づけ」に基づくよりは、by 句の情報量に基づくほうがストレートに説明できる。以上のようなことは、いわゆる文末焦点 (end-focus) の原則の一環と考えることができる。

次の文も同じ原理が働いている。

(63) The moon was reached for the first time in 1969.

ここでは in 1969 という部分に情報の焦点がある。for the first time のような語句を伴った場合、「初めて～したのは…の時だ」という分裂文 (cleft sentence) に近い意味になることが多い。したがって It was in 1969 that the moon was reached for the first time. に近い意味の(63)は、文末焦点の原則に合致し、by 句がなくても容認されることになる。

#### ④その他

次節でも述べる want の受身は「～が欲しい」という意味では普通受身を許さないが、(65)の文は容認される。

(64) ? \*This book is wanted by most people.

(65) What is wanted by most people is to get rich.

want の場合, by 句が by most people のような語句であってもそれほど容認可能性は高くないのだが, (65)のように主語が what であると容認可能となる。この理由は現段階では不明であるが, ②で挙げた「非実現」を示す要素の一つである可能性がある。

Postal (1974, p.180) は次のように '関係代名詞 + be' の部分が表層に存在していれば非文であるが, これが省略されると容認可能であるという例を挙げている。

(66) \*The things which are wanted by most people are worthless.

(67) The things wanted by most people are worthless.

この理由も明らかではないが, 上で述べたことと関連があるかもしれない。

本節では受身を容認しやすくする要因をいくつか挙げてきたが, これらが2つ以上重なると, 2節の( I )のようなタイプでも受動態が可能になることがある。たとえば(68)と(69)においては, 2つの要素が働いているために容認可能となっている。

(68) A mile was first run in four minutes by Bannister. (Palmer 1988, p.83)

(69) A mile can't be run in four minutes by anyone.

run a mile は本来 weigh や cost と同類の数量を表す語句をとる表現であり, a mile を主語にした受身は通例許されないが, (68)では本節で述べた要因のうち①と③, (69)では①と②が働いており容認可能となっている。一般的にいくつかの要因が重なれば可能である, といったことは言えないと思われるが, いくつかの要素の相互作用により容認可能性が増す, ということは確かである。

#### 4 個々の語彙項目の特質

この節では2節で挙げた動詞のいくつかを例にとり, 受動態の制約に関しては一般原理の及ばない部分があって各語彙項目につき詳しく観察する

ことが必要であることを見る。

2 節(Ⅱ)類の所有・非所有にかかわる動詞に目を向けてみよう。have と lack は本来受動分詞のない動詞と考えられるが、既に述べたとおり have は一定の条件の下で派生的に受動態を生じる。では、have と同じく所有を表す own と possess はどうであろうか。この2つの動詞は have と異なり、所有の意味でもある程度受動態を許す。

(70) Many stores are owned by that company.

(71) The feeling of physical superiority is usually possessed only by the very young.

そして、どちらかという to possess<sup>6)</sup> のほうが own よりも制限は厳しいようである(小西編 1985参照)。

こうしたことは have, own, possess のあいだの「意味」の差に帰せられることであろうか。安井(1989)によると、have を含む表現は一種の存在文であり、have の目的語は通例不定名詞句である。これに対し、own は単なる存在ではなく「所有権」を表すもので、I own it. や Peter owns the piano. のように定名詞句も目的語としてとることができる。

しかし、have と own のあいだにこうした意味の相違があるとしても、これが受動態の可否にどう関係があるのか明らかでない。(70)の受動文では own されている対象が have の場合と同じく不定名詞句であるがこれは適格文である。possess は、own と同様「所有権を持つ」の意味合いが感じられるのに、own より受動態になりにくいのはなぜかという問題もある。また、実際には I have the car. のように have の目的語として定名詞句がくることも可能である。しかも小西編(1985, p.1102)によると、possess の目的語は不定名詞句が普通で、? \*I possess the car. は不自然であるという。もし安井の示唆するように、定名詞句をとるかどうかということと受動態の可否とが関係あるならば、possess は own と逆に受身を許さないはずである。実際は own と possess はいずれも受動化が(やや不自然でも)可能である。このように、have, own, possess のあいだの受動可能性の差

は意味の相違と対応するわけではない。

次に want について考えてみよう。want は「～が欲しい」という意味では通例受身を許さない。by 句が by most people 等の総称的語句であってもそれほど容認可能性は上昇しない<sup>7)</sup>。

(72) \*The book is wanted by Tom.

(73) ?? The book is wanted by most students.

(74) ? Higher pay is wanted by most workers.

これに対し、「(人)に用がある、来て欲しい」という意味で want の受動態が可能なことはよく知られている。

(75) The man is wanted by the police for murder.

(76) You are wanted on the phone.

(77) Bill is wanted in the Oval Office by the President.

(78) John is always wanted for the big jobs.

なぜ(72)では受身がほぼ不可能で、(75)–(78)では全く自然なのであろうか。

want と同種の動詞として分類されることの多い like, prefer, love 等<sup>8)</sup>は want より自由に受身をとる。

(79) John is liked by everybody.

(80) Meat is generally preferred to fish here.

また、同じ「願望」を表す句動詞の hope for, wish for の受身も存在する。

(81) Better testimony could not have been hoped for.

したがって、want の受身に対する制約は、like や hope との関連でなく、lack との関連で捉えられるべきである。want の原義は「～を欠く」という lack の意味であり、この意味ではどんな文脈でも受動態は非文である。

(82) \*Courage is wanted by Mary.

(83) \*Courage is wanted by most young women in this country.

つまり、lack と同じく [not have] (非所有) を表すとき受身は全く不可能であるが、これが転じて [wish to have] (所有の願望) の意味になると(73)–(74)のようにある程度受身が可能となる。そして(75)–(78)のようにさらに原

義から離れて have の意味と関連がなくなると受動態は自由に起こるようになる。

林 (1991) でも述べたように, (75)–(78) の want は, [wish to have] ではなく [wish to arrest], [wish to speak to], [wish to meet] のような動作を含む意味に分析しうる。この点で, have が動作を表す意味の場合にある程度受動態が可能になるということと共通している。

本節では, 2 節で(Ⅱ)に分類した動詞のいくつかを取り上げて, 受動可能性にまつわる現象が必ずしも動詞の表面的意味から予測できるものではなく, 個々の語彙項目を詳細に検討しなければ明らかにならない特性 (idiosyncrasy) であることを見た。

## 5 まとめ

本稿の議論の理論的インプリケーション, 及び今後の課題となりそうなことを次に述べる。

- ① 「受身主語が影響を受ける (affected) かどうか」や「受身文が主語の特性 (quality), 特徴づけ (characterization) を表しているかどうか」といったことは擬似受動文の説明には役に立っても, 受身文一般に働く原理とまではいかない。少なくとも議論の際には擬似受動文と普通の受動文とを分けて考える必要がある。
- ② 受身にならない動詞・制約のある動詞を分類するとき, be や have と共通性のある動詞以外に, 目的語として場所 (Location) をとる動詞を考慮することが重要である。また, by 句の存在を要求する follow, precede, surround 等も受動態に制約のある動詞とみなすのがよい。
- ③ 受動態を成立しやすくする要因は 3 節で挙げたとおりいくつか存在する。これらは本稿で扱った以外の動詞 (擬似受動文を含めて) にも関与すると思われる。これは今後の課題である。

- ④ 4節で have, own, possess 及び want について見たように、受動可能性は動詞の表面的意味から必ずしも予測できるものではなく、個々の語彙項目の特性としか言えない部分がある。want のようにその原義が何かということを考えに入れる必要がある場合もある。

以上、本稿では受動態が不可能な他動詞、受動態に制約がある他動詞の語法を考察してきた。

## 註

- 1) McCawley (1988, p.568) 参照。
- 2) Quirk et al. (1985, p.736) は, resemble の次のような受身を容認する話者もいるとしている。
  - (i)(?) Geoffrey is resembled by his eldest child.  
また、次の文の容認度が高いのは数量詞の作用域の問題が関与している。
  - (ii) Everyone is resembled by someone.  
能動態 Someone resembles everyone. を使うと「すべての人に似た人が一人存在する」という解釈が生じてしまう。なお、57も参照。
- 3) be / get married to someone は可能であるがこの married は形容詞化されている。
- 4) marry, meet は下のような用法では受動態が可能である。
  - (i) Seven couples were married by the priest.
  - (ii) His eye was met by a gruesome scene.
  - (i) の marry は「結婚させる」(ii) の meet は「飛び込んでくる」の意であり、主語と目的語が対等の関係ではない。
- 5) ここでいうのは主題関係 (thematic relation) としての「場所」であり、survive の主語、目的語や befall の目的語のように現実世界では「人」であっても言語上場所と捉えられる場合もある。
- 6) possess は「～にとりつく」という意味では受動態になる。  
He is possessed by an evil spirit.
- 7) ただし(65)参照。
- 8) これらの動詞は NP+to 不定詞をとる構文では want と同類で、すべて受身を許さないが、このことは本稿での議論とは独立した統語論上の問題と考えるべきである。

## 参考文献

- Bolinger, D. (1975) "n the Passive in English," *The First LACUS Forum*, 57-80.  
Cureton, R. (1979) "The Exceptions to Passive in English: A Pragmatic Hypothe-



- sis," *Studies in the Linguistic Sciences* 9, 39-53.
- Davison, A. (1980) "Peculiar Passives," *Language* 56, 42-66.
- 林 龍次郎 (1991) 「want の受動態」『英語青年』136巻3月号, 9.
- Jackendoff, R. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 小西友七(編) (1985) 『英語基本動詞辞典』研究社.
- Lees, R. B. (1960) *The Grammar of English Nominalizations*. The Hague: Mouton.
- McCawley, J. D. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*. Vol. 2. Chicago: Chicago University Press.
- Palmer, F. R. (1988) *The English Verb*. Second Edition. London: Longman.
- Postal, P. (1974) *On Raising*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 高見健一 (1989) 「擬似受動文について」『英語青年』135巻9月号, 21-23.
- 安井 稔 (1989) 「英語の受動文について」『英文法を洗う』研究社, 104-142.